

イライザ・タルカット女史略年譜

若　山　晴　子

イライザ・タルカット (Eliza Talbot) —明治時代のほとんどをおおうその半生を「闇に住む民に大いなる光を」与えるために捧げたこの米国伝道会日本派遣婦人宣教師がなくなった時、その終焉をみとった同僚のバロウズ女史は書いた、—女史は何もおっしゃいませんでした。その必要はなかったのです。あの方はデイヴィス氏と同じく、「私の遺言は私の人生」と言える方だったからです—と。但し、その人生はおよそ他人の目に隠れたものであったと見える。女史は自身の働きを喧伝しなかった。その上、活動の労苦については殊に語ることをせず、数少ない宣教師文書も常に晴朗の気を漂わせたものであるが故に、人は、女史にゆだねた任務について思い煩うことから免れ、これを殊更の問題としてとり上げる必要を感じなかったせいであろうが、公けにされた報告・残された記録は、女史から直接の恩を受けた人々の回顧録風の証言を除けば、多いとは言えない。これらの回顧録は感動的で、女史のノールなプロフィールをよく伝えている。しかし反面、記事の主観的な性格により、書き手の思い入れにどれほどの考慮を払うべきかということのほか、なおそれ以上に、その記述の時間的空間的配列に対してどれほどの信憑性がおけるものかを問い直す必要を感じさせることも多い。—人生そのものが遺言たり得た女性の事蹟は実際いかなるものであったのか。

タルカット女史の日本における最初の事績が本学院の創立であったことにより、米国伝道会の女史に関する文書史料を取り扱うについて、それらの前後関係を明らかにするために、女史の足どりをなるべく正確につかんでおく必要を感じていたが、今般、女史の生誕百五十周年を迎えるにあたり、これを略年譜の形でまとめてみることにした。但しこれまでに入手し得た文献類には限りがあつて、未詳・未確認の事項は今なお数多く、爾後の補筆・校訂を期して史料の蒐集を続行すべきことを痛感している。殊に女史が、北は札幌から南は宮崎、更にはハワイの日本人社会にまで、奉仕と伝道の手を差しのべたその実情を、今後さらに史料をもとめて探ってみたいものと考えている。

凡 例

一、本「略年譜」中、典據史料に関する年号の標記は、單位数なしの漢数字四桁をもって西暦を、一字もしくは單位数の入った二乃至三文字をもって明治の年号を示すものとする。

一、A B C F M は American Board of Commissioners for Foreign Missions の略号で、米国伝道会と訳している。また Woman's Board of Missions は W B M と略記される。

一、本稿作成のために用いた史料・参考文献は次のとおり（上段はその略号である。長期に亙る定期刊行物の一部を利用した場合は、その時期を（ ）に入れて各史料の末尾に附記する。このたびはおおむね、タルカット女史帰天の翌年末を限度とした。

(一) 公刊文献史料

- | | |
|-------|--|
| M H | <i>Missionary Herald of the A.B.C.F.M.</i> (1869-1871, 1873-1912.) |
| A R | <i>Annual Report of the A.B.C.F.M.</i> (1869-1912.) |
| L L | <i>Life and Light for Woman by W.B.M.</i> (1876-1881, 1885-1912.) |
| M N | <i>Mission News of the A.B.C.F.M. in Japan Mission</i> (1898-1912.) |
| L E L | Lora E. Learned, <i>Eliza Takagi, The Florence Nightingale of Japan</i> , — Pioneer Series, W.B.M., Boston. |
| — | B. G. Northrop, "The Clara Barton of Japan," — <i>The Congregationalist</i> , 27 Feb. 1896. |
| — | Henry Loomis, <i>A Missionary Lady among the Japanese and Chinese Soldiers</i> , — for Private Circulation only, Yokohama Seishi Bunsha, 1895. |

John A. Cockrill, "A Missionary Heroine, Another Florence Nightingale Who Has Brought Sunshine to Distressed Chinese Soldiers." — *Special Correspondence of the Herald*, 1 Oct. 1895.

—— 七一雜報、神戸雜報社、明治八年十二月創刊。(創刊—明治十四年十二月)

—— 旭光、神戸旭光社、明治二十八年一月創刊。(創刊—大正元年)

—— 福音週報、東京・福音週報社、明治二十三年三月創刊、二十四年二月終刊。

—— 福音新報、東京・福音新報社、明治二十三年十月創刊。(明治三十年五月—大正元年)

—— 新報 福音新報、東京・福音新報社、明治二十三年十月創刊。(創刊—大正元年)

—— 月報 神戸教会月報、神戸教会、明治二十三年八月創刊。(創刊—大正元年)

—— 石井 石井十次日誌、石井友愛記念会、昭和四十八年—五十八年

—— 同志社百年史 資料篇(一)、(二)、同志社、一九七六年

—— 沢山保羅研究七、梅花学園沢山保羅研究会、一九八三年

(三) 米国伝道会宣教師文書

T 書簡 Letters of Miss Eliza Talcott. — Letters of Miss Susan A. Searle.

D 書簡 Letters of Miss Julia E. Dudley. — Letters of Rev. D. C. Greene.

B 書簡 Letters of Miss Martha J. Barrows. — Letters of Rev. J. D. Davis.

C 書簡 Letters of Miss Virginia A. Clarkson. — Letters of Rev. J. H. DeForest.

—— Letters of Miss Emily Brown. — Letters of Dr. J. C. Berry.

(三) 私信△デフォレスト女史の史料集より△

D W L A Letter from Dr. Dwight W. Learned to Rev. Arthur W. Stanford, Kyoto, Nov. 16, 1911.

B W P A Letter from Mrs. Belle W. Pettie to Mrs. Elizabeth S. DeForest, Kasumi, Nov. 6, 1911.

(四) その他の参考文献

横川四十八「偉人タルカッタ女史」—「ゆふはな」第五号、神戸女学院文芸会、大正十年

Charlotte B. DeForest, *The History of Kobe College*, 神戸女学院、一九五〇年

和島芳男『神戸女学院八十年史』神戸女学院、一九五五年

神戸女学院百年史 総説、一九七六年、各論、一九八一年、神戸女学院

小崎弘道編『日本組合基督教會史』日本組合基督教會本部、大正十三年

近代日本總合年表、岩波書店、一九六八年

略 年 譜

一八三六年(天保七年)

五月二十二日 イライザ・タルカット誕生。米国コネティカットのロッ

クヴィルに羊毛工場を営むラルフ・タルカットとスーザン・ブル夫妻
の間の四人の女兒のうちの第二子であった(MN一九一一年十二月四六頁、
LEL一頁、DWL)。

この年 日本においては天保の飢

饉が頂点に達し、翌年には大鹽平
八郎の乱がおこりました。

一八四〇年(天保十一年)

十二月五日 日本における伝道活動の最初の協労者となるジュリア・ダ

この翌年 老中水野忠邦、天保の

ッドレー誕生。

改革に着手。

一八四七年(弘化四年)

この年 ラルフ・タルカット帰天(MN前掲)。

学齡期

イライザはファーマントンのミス・ポーターズ・スクールを卒

業後、将来を属望されるが、母の急逝によりここを去り、ニューブリ

テン・ノーマル・スクールに入学する(LEL一、二頁)。

一八五三年(嘉永五年十一月二十二日)～六年十二月二日)

一八五七年(安政三年十二月六日)～四年十一月十六日)

この年 ニューブリテン・ノーマル・スクールを卒業。以後二年間、ミ
ス・ポーターズ・スクールで教鞭をとる(MN前掲)。

一八五八年(安政四年十一月十七日)～五年十一月二十七日)

一八五九年(安政五年十一月二十八日)～六年十二月八日)

この年 ノーマル・スクールに転じ、更に四年間教職につく(MN前掲参
照)。

一八六一年(万延元年十一月二十一日)～文久元年十二月一日)

この頃 D・W・ラーネドの父(やがてイライザのすぐ下の妹ローラの夫とな
る。ローラ二八歳の時のことである。)が、コネティカットのプリマスに移
り住み、母方のおじウィリアム・ブルの農場に起居していたタルカッ
ト家の姉妹を知る(DWL)。

一八六三年(文久二年十一月十二日)～三年十二月二十一日)

7・8 ベリー浦賀に来航。

6・17 日米条約を下田で締結。

秋 欧米諸国で金融恐慌。

7・29 日米修好通商条約締結。

10・13 安政の大獄はじまる。

この年 リギンス、ウィリアムズ、
ヘボン、ブラウン、シモンズ、フ
ルベッキら日本に来航。

4・12 南北戦争はじまる(一八
六五年4・9)。

この年 イライザは教職を退き、以後プリマスにおいて病身のおぼの世話に専念する(MN前掲)。

一八六七年(慶應二年十一月二十六日～三年十二月六日)

一八六八年(慶應三年十二月七日～明治元年十一月十八日)

一八六九年(明治元年十一月十九日～二年十二月二十九日)

十月六日、七日 米国伝道会が日本伝道の開始を満場一致で決議し、日

本派遣宣教師の嚆矢としてD・C・グリーンを選任する(MH一八六九年三八〇―三八四頁、AR同年巻頭三七―四二頁)。

十一月三十日 グリーン夫妻横浜に到着、江戸に滞在する(MH一八七〇年六七頁)。

一八七〇年(明治二年十一月三十日～三年十一月十日)

三月 グリーン夫妻は神戸に伝道の本據を移す(MH前掲二三〇―二三一、

二八五―二八六頁)。

この年 横浜居留地米領事館内でプロテスタント合同教会設立。

11・9 大政奉還上表提出。

1・1 兵庫開港。 4 切支丹

禁制の高札神戸市中に掲げられる。

5 浦上切支丹十三名斬首される。

10・23 明治と改元。

5・10 米国大陸横断鉄道開通。

7・25 諸藩に版籍奉還を許す。

11・17 スエズ運河正式開通。

1 浦上切支丹信徒四〇〇〇名流刑。 1・26 東京横浜間電信開

六月 この月発行のMHに、切支丹迫害のことを告げるプロジェクト

の書簡(二月二十八日附)が掲載される(二〇三頁)。

一八七一年(明治三年十一月十一日〜四年十一月二十日)

三月三日 O・H・ギューリック夫妻神戸着(AR一八七一年七五頁)。

十二月一日 J・D・デイヴィス夫妻神戸着(AR一八七二年六八頁)。

一八七二年(明治四年十一月二十一日〜五年十二月二日)

この年^① イライザはニューヘイヴンにおける米国伝道会の集会に出席し

てトルコ伝道にたずさわる宣教師に会い、海外伝道への志をたてるに

至る(MN前掲、LEL二頁、DWL)。

五月二十七日 ベリー夫妻神戸着(AR前掲)。

十二月三日 米国伝道会のコレスポンディング・セクレタリーN・G・

クラーク博士宛てに、同伝道会の日本派遣婦人宣教師に任命されたタ

ルカット女史からの最初の書簡が認められる。十二月二日附クラーク

信への返書である(T書簡三〇八号ニューロンドン発)。

十二月十三日 T書簡三一〇号^②ニューロンドン発。タルカット女史はへ

ボン博士の手紙(日本だよりであろう)を読んだと言う。

通。 2・3 大教宣布の詔。

3・14 東京、京都、大阪間に郵便開始を定める。

6・30 市川榮之助夫妻逮捕。

12・28 切支丹信徒五六名逮捕。

3・10 日本人最初のプロテスタント教会(日本基督公会・無教派)が横浜居留地に設立される。

9・5 学制を頒布。

10・14 新橋横浜間鉄道開業式。

11・25 市川榮之助獄死。

12・9 太陽暦を採用するの詔書(明治五年十二月三日を以て明治六年一月一日と為す)。

12・16 宇治野英語学校開設。

十二月十九日 T 書簡三〇九号 ニューロンドン発。日本への同行者ダッ

ドレー女史について詳細を得ていないことが窺われる。

一八七三年(明治六年)

一月二十一日 T 書簡三一一号 ニューヘイヴン発。パスポートの手續中。

クラーク博士より「たくさんの」書類を受けとる。

一月二十八日 T 書簡三一二号 ニューロンドン発。一月二十七日附クラ

ーク信と三〇ドルの小切手及び指令を受領しての礼状である。

二月十四日 この朝ダッドレー女史のもとにオークランドからのタルカ

ット女史の便りが届く(D 書簡七〇号)。

三月一日 ダッドレー女史と共に米国サンフランシスコ出立(MH 一八七

三年一三三頁^④)。但し、二人の着任を日本の先任者たちに告げる本部の

指令書も同じ船に乗っていた。―二六日間の船旅ののち横浜に寄港し、

ルーミス師、ブライン夫人を訪ねる(T 書簡三一三三号)。

三月三十一日 神戸着(MH 前掲二六九頁、AR 同年六九頁、T 書簡三一三三号)。

グリーン、デイヴィスの出迎えを受け、デイヴィスの家に旅装を解き、

ここに寄寓して活動の準備につくことになる。

四月十二日 T 書簡三一三三号神戸発。日本着任の報告である。

六月十六日 T 書簡三一四号有馬発。八月末まで有馬に滞在の予定。日

2・24 切支丹禁制の高札の撤去はじまる。この頃 神戸湊川神社宮司折田秀家が洋教探索を行っている。

春 神戸教会の前身たる神戸元町講義所開設。 12・7

神戸元町講義所安息日学校開校式。

本語の勉強と伝道は続行中。

九月二十八日 J・L・アッキンソン夫妻神戸着(MH前掲四一三頁)。

十月^④ 神戸花隈村前田兵藏方に私塾を開く。

この年 AR誌上の「一八七三年九月までの名誉会員」に名を連ねる。

一八七四年(明治七年)

四月 教場を北長狭の白洲退藏方に移す。

五月十六日 T書簡三一五号神戸発。「二十四名の婦女子を擁する」学校の

運営と民間伝道に携わっている(AR一八七四年六〇頁、MH同年三一

七、三六四頁併照)。以後のこの二元的活動については、一八七五年、

一八七六年のMH及びAR、LL一八七八年一三四頁等参照。

八月 有馬滞在(T書簡三一七号)。

八月七日 T書簡三一七号神戸発^③。

九月 ペリー博士と共に播州伝道の旅に出る(T書簡三一六号、MH一八七

五年一七頁、AR同年六〇頁)。

十一月末 デフォレスト夫妻、アダムズ夫妻、新島 襄の着任(MH一八

七四年三九七頁及び一八七五年七三頁参照)。

十二月一日 T書簡三一六号神戸発。ガールズ・ホーム設立の許可待ち。

十二月五日 T書簡三一八号神戸発^⑤。

4・19 攝津第一基督公會(現神戸
教会)設立。 5・24 攝津第二基
督公會(梅本町公會・のちの大阪教会)
設立。

この年 AR 誌上の「一八七四年九月までの名誉会員」に名を連ねる。

一八七五年(明治八年)

三月二十八日 兵庫伝道所の開設に参画(MH一八七五年一九八頁)。

四月 この月発行のMHにT書簡三一六号の一部が紹介される。(二二一

―一二頁)。

七月 この月発行のMHにT書簡三一八号が載る(一九六一一九八頁)。

八月四日 T書簡三一九号神戸発。学校の建築が始まっている。女史は、

官立学校の視察と教員募集のため京都に出かけもした。

十月十二日 寄宿学校開校(AR一八七六年七五頁)①。

この秋 明石伝道に通う(MH一八七六年八一、八二頁)。

十一月二十三日 D・W・ラーネド夫妻横浜着(MH前掲六八頁)。程なく

京都に入る。

この年 AR 誌上の「一八七五年九月までの名誉会員」に名を連ねる。

一八七六年(明治九年)

春以来 膝の故障に悩まされている(T書簡三二〇号)。

三月末 マーサ・バロウズ女史神戸着(MH前掲一四一頁参照)。

八月から ダッドレー女史は肺をいたため静養中で冬は京都に滞在した

(D書簡七三号、T書簡三二〇号)。

7・27 攝津第三基督公會(現三田
教会)設立。 11・29 同志社英学
校開校。 12・27 「七一雜報」
創刊。

1・30 花岡山の誓約「奉教趣意
書」。 8・6 攝津第四基督公
會(現兵庫教会)設立。 8 ベリ
1 「獄舎報告書」を政府に提出、

八月十八日、二十五日 「七一雜報」に新年度開校の広告を出す。

十月十八日 T書簡三二〇号神戸発。学校業務専従者派遣を要請。

十二月末 京都(ダッドレー女史の所か)訪問(D書簡七三号)。

この年 夏以前に、タルカッタ女史、ギューリック女史の指導のもとに

四人の日本婦人が訪問伝道を始める(AR前掲七六頁)。

一八七七年(明治十年)

二月六日 T書簡三二一号神戸発。再び学校業務専従者派遣を請う。

八月七日 T書簡三二二二号比叡山発。

十一月二十八日 クラークソン女史神戸着(MH一八七八年八五頁)。

一八七八年(明治十一年)

三月七日 新校舎落成を祝い公開授業を行う(雑報三月十五日一二頁)。

三月二十九日 T書簡三二三号神戸発。米国伝道会の会計L・S・ワー

ド氏宛てにオルガン購入に関する報告。

七月二十六日、八月二日、九日、十六日 「七一雜報」に新年度九月開

校の広告を掲載(各号八頁)。

十月十四日、十五日 明石教会設立のための洗礼志願者試問の勞をとる

(雑報十月十八日三頁)。

十二月 この月発行のLLに、タルカッタ女史の便りの抜萃が二種掲載

監獄改良の端緒を開く。 9・9

熊本洋学校の学生たちが同志社に

入学。 11・末 京都に第一、第

二、第三基督公會設立。

1・20 浪華公會設立。 2・15

西南の役(↓同年9・24)。 10・

20 多聞公會設立。

1・2 日本基督教伝道会社設立。

3・30 安中教会設立。 10・15

明石教会設立。

される。その一は京都の学校（同志社か）を訪ねたこと（三五九頁）、その二は夏の旅の道すがら名古屋の寺院でまわりの人に救い主の話をしたこと（三六〇―三六一頁）。

一八七九年（明治十二年）

夏以前 学校の責任をクラークソン女史に委ね、他の先任婦人宣教師たちと共に民間伝道に多くの時をさくことになる（AR一八七九年七七頁）。この頃「女學校」は「神戸英和女學校」と改称したらしい。十月初め クラークソン女史が病氣静養のため大阪に数日を過ごす間、タルカット女史が代理で校務をみた（D書簡七六号）。

一八八〇年（明治十三年）

四月九日 岡山の新伝道区訪問（T書簡三二四号、雜報四月二十三日三頁）。七月五日 T書簡三二四号神戸発。岡山赴任決定に伴う感慨を披歴。秋 岡山に移る^⑧（雜報九月十七日八頁、AR一八八〇年八〇、八二頁）。ペリー博士のもとに滞在して伝道活動に従事（MH一八八一年五六、二三四頁、AR同年七六頁）。

十月十三日 岡山教会設立の式に列席（雜報十月二十二日三頁）。

一八八一年（明治十四年）

3・14 松山にコレラ発生、全国に蔓延して年末までに患者一六万をこえる。6・12 同志社第一回卒業式。7・3 米国前大統領グラント將軍来日（9・3 離日帰米）。9・21 今治教会設立。

3・29 同志社がタルカット女史の「同居ノ免狀御下渡願書」を提出。4・19 新約聖書翻譯完成祝賀会。10・13 岡山教会設立。10 神戸女子神学校の基がおかれる。

七月三日 「今治教會會堂開の式」に列席(雜報七月十五日二頁)。

八月三十日 T書簡第二部二五四号日光発。ケリー夫妻、カーティス氏

と共に中部日本の旅をして、日光には数週間の滞在中であると言う。

一八八二年(明治十五年)

一月末 クラークソン女史は病氣のため離日帰米(C書簡三五七号及び三

五八号参照)。これによりタルカット女史が急遽呼び戻されて英和女學

校校長代行の任につく(AR一八八二年六七頁、DWL)。タルカット女史

は、折しも来日中の末妹マリアを伴って帰神し、マリアは翌年十二月

の帰米まで英和女學校に在って姉を助け、また音楽など教えた(AR

一八八四年六三頁、めぐみ十二号一六頁参照)。

十一月二十四日 エミリー・ブラウン女史来日(MH一八八三年七五頁)。

十二月二十二日 神戸英和女學校第一回卒業式をとり行う。

一八八三年(明治十六年)

夏 妹マリアと共に有馬滞在か(T書簡二五五号)。

八月二十八日 有馬でマリア・タルカット女史がクラーク博士宛てに便

り(T書簡二五五号。学校の状況報告をも兼ねるこの書簡は、伝道会のファイ

ルにおいて姉の書簡と連続の整理番号により保存された)。

十月二十六日 スーザン・ソール女史来日(MH一八八四年三三頁)。

10・12 国会開設の詔出る。

この年 神戸女子神学校はダッド

レー女史の賜暇帰米により一時休校となる。 4・26 高梁教会設

立。

3・15 教会・講社結集・説教所

などの設置条件を緩和、地方庁に届け出ればよいこととする。

10 原胤昭、無償で自邸を免因の保護所にあてる。 10 O・H・

十一月二十二日 マリア・タルカット女史からクラーク博士宛てに便り

(T書簡二五六号神戸発)。十二月半ば頃姉と共に離日のつもりであるが、

姉はまだこれを公表していないと伝えている。

十二月八日 マリア・タルカット女史からクラーク博士宛てに便り(T書

簡二五七号神戸発。「萬國郵便聯合端書」を用いている。

同月 タルカット女史賜暇帰米。妹マリアと共に日本を離れ西まわりで

帰国の途につく(AR前掲)。

一八八四年(明治十七年)

二月二十八日 イタリア着(T書簡二五八号)。

三月二十二日 T書簡二五八号ローマ発。タルカット女史が再びクラ

ーク博士宛てに自ら筆をとっている。旅程について報告し、寄港地にお

いて日本国外の伝道活動を垣間みられたことの喜びを告げる。

四月二十五日 ジュネーヴ着(T書簡二五九号)。

五月四日 T書簡二五九号インターラーケン発。クラークソン女史宛て

の便りを同封する。

七月一日 ニューヨーク着(T書簡二六〇号、MH前掲三六九頁)。

七月七日 T書簡二六〇号ニューロンドン発。

七月十四日 T書簡二六一号ニューロンドン発。

ギューリックらによって北日本伝

道団が組織される。 11・28 鹿

鳴館開館式。 この年 英和女學

校ではブラウン女史がタルカット

女史のあとを受けて校務の責任を

負うことになった。

3・5 笠岡教会設立。 11・1

神戸女子神学校再開。 この年

同志社英学校にはリヴァイヴアル

の気がみなぎっている。

九月十日 トマストンより電報で、セイレムの集会の時と所とを問い合
わせる(T書簡二六二号として整理される)。

十月十五日 WBMのハートフォード支部年次例会に出席。女史渡来以
来の日本の変化について語る(LL一八八五年六一頁)。

一八八五年(明治十八年)

一月十四日 WBMの年次例会に出席し、日本における活動について語
る(LL前掲九六頁)。

一月二十日 T書簡二六三号ニューロンドン発。

二月二十三日 T書簡二六四号ニューロンドン発。

五月二十八日 WBMの記念例会に出席し、日本における熟練教師の必
要性について語る(LL前掲二九六頁)。

八月中 オークランドに滞在(C書簡四一〇号及び四一一号参照)。

在米中 オークランドやプリマスの教会において話をした(LL一八八六
年三七頁)。

八月十八日 クラークソン女史と共にサンフランシスコをたつ(MH一八

八五年四〇八頁、LL同年三三〇頁、C書簡四一二号)。

九月八日 両女史岡山着(MH前掲四七九頁)。

一八八六年(明治十九年)

1・27 ハワイ向け第一回官約移
民九二七人、横浜出発。 6・7

福岡教会設立。 7・20 『女學

雑誌』創刊。 12・22 太政官制

を廃し、内閣総理大臣および宮内

・外務・内務・大蔵・陸軍・海軍

・司法・文部・農商務・逓信の各

大臣をおき、宮内以外の諸大臣で

内閣を組織することに定める。同

日 第一次伊藤博文内閣成立。

三月現在 神戸女子神学校在。ダッドレー女史と共に働いている（LL

一八八六年三〇、三三三頁）。タルカット女史自身は「冬中ダッドレー

女史と共に」在った旨伝えている（T書簡二六五号）。

四月十九日 T書簡二六六号岡山発。

八月十六日 T書簡二六五号比叡山発。

九月七日 T書簡二六七号比叡山発。「ABCFMの活動に関心あるク

リスチャンの婦人方へ」と題されたアピールである。

一八八七年（明治二十年）

この年 岡山に在って伝道活動に従事。炭谷小梅、石井十次らに絶大な

感化を及ぼし、それぞれの活動・事業に邁進する力を与えた。この時

期の女史の活動については、AR一八八七年一二七頁、MH一八八九

年二五一頁（高梁伝道）、LL同年三九五、三九六頁が数行を割いてい

るにすぎないが、一方『石井十次日誌』は、この年から明治二十九年

まで、彼がいかに足繁く女史を訪ねたかを克明に記している。^⑩

一八八八年（明治二十一年）

二月 トルコ飢饉のため本部宛てに献金（MH一八八八年一八二頁）。

九月二十四日 炭谷小梅と共に東京に赴く（石井二十一年一五六頁）。

この年 ハウ女史の初めての日本国内旅行に同行した（LL一八八九年八

5 前年よりのコレラ再び蔓延、

夏から秋にかけて大流行。 6

日本、万国赤十字条約に加盟。

12・6 婦人矯風会創立。

9・22 石井十次、岡山孤児院を

設立。 11・15 同志社看護婦学

校創立、開業式。 12・26 保安

条例が公布、施行される。

4・30 黒田清隆内閣成立。

7・8 高鍋教会設立。

五、一三四―一三六、三二七頁。

一八八九年(明治二十二年)

一月二十八日 岡山に帰る(石井二十二年二八頁)。

この年 マクレナン女史と共に高梁伝道に赴く(MH一八八九年二五―二五三頁)。

秋 同じくマクレナン女史と共に鳥取伝道に赴き、翌年三月まで滞留して活動することになる(T書簡第三部三四号、MH一八九〇年一五二―一五三頁、MN前掲四九頁、LL一九〇七年四〇〇頁)⑩。

一八九〇年(明治二十三年)

三月八日 岡山に帰っている(石井二十三年六四頁)。

四月十二日 T書簡三四号横浜発。クラーク博士の要請に応じて鳥取で
の事情を報告。現在には前橋にシェッド女史を訪ねる途上に在ると言う。

四月十八日 岡山に帰っている(石井前掲一一五頁)。

九月二日 比叡山にいる(石井前掲二八二頁)。

秋 京都に転任。以後同志社看病婦学校において宗教教育を受け持つ。か
たわら伝道活動に携わる。⑪

一八九一年(明治二十四年)

六月四日 福井着(T書簡三五号)。この地方への一〇日間の旅である。

2・11 大日本帝国憲法発布。

12・24 第一次山縣有朋内閣成立。

この年 凶作による物価騰貴を契

機として日本最初の経済恐慌(一八九〇年恐慌)が兆しはじめる。

4・6 新島襄の帰天(1・23)に

より同志社社長に小崎弘道就任。

8・30 英和女學校以文会結成、

『めぐみ』創刊。 10・30 「教

育ニ関スル勅語」発布。 11・25

第一回帝国議會召集。

5・6 第一次松方正義内閣成立。

六月五日 T書簡三五号福井発。

六月三十日 T書簡三六号京都発。

八月十八日、十九日 比叡山にいる(石井二十四年二六三、二六四頁)。

九月二十七日―二十九日 岡山にいる(石井前掲三一七、三一八頁)。

クリスマス休暇中 地震被災地救援のヴォランティア活動に従事(MH

一八九二年一〇頁。石井前掲四二九頁参照)。

一八九二年(明治二十五年)

一月十一日 京都に戻っている(石井二十五年五頁)。

一八九三年(明治二十六年)

四月二十五日 T書簡三七号京都発。この地での活動の内容を報告して、

学校での日々の聖書講義、訪問伝道、病院に患者を見舞うこと等を挙げ、しばしば伏見に赴いていると述べる。

六月十四日―二十日 岡山に来ている(石井二十六年九八、一〇四頁)。

七月 マリア・タルカット名義で本部に一〇〇〇ドル献金(MH一八九三年三八〇頁)。

十一月三十日、十二月一日 石井十次の孤児院を訪問(石井前掲三二七、

三四九頁)。

5・11 天津事件。 10・28 岐

阜県愛知県一帯に大地震(濃尾大地震)。災害地向け救恤品の無賃輸送を初めて実施した。

7・25 広島教会設立。 8・8

第二次伊藤内閣成立。

1 ハワイで米人支援のクーデターがおこる。 4・3 婦人矯風会がキリスト教関係婦人団体を糾合して全国的組織の「日本基督教婦人矯風会」となる。 7・1 活田教会(現雲内教会)設立。

一八九四年(明治二十七年)

一月二日 日向伝道のため岡山より炭谷小梅を同行者として出発(石井

二十七年三頁)。高鍋にいたる(MH一八九四年二〇九頁)。

六月二十七日 京都にいる(石井前掲一八四頁)。

晩秋 甲賀ふじと共に広島を訪ねる(MN前掲)。

十二月 広島病院における伝道活動の必要性を感じ、ここに活動の場を移す。^⑩ ルーミス、ノースロップ、コックリル、旭光二十九年一月五日三頁等はこぞって、この時タルカット女史が中国人捕虜に大いなる感化を及ぼしたことを紹介している。

感化を及ぼしたことを紹介している。

一八九五年(明治二十八年)

この年 広島の子備病院を訪ね、日清戦争の中国人捕虜や両国傷病兵を

慰問、「希望者あれば道の話を」(旭光二十八年八月五日二頁)して倦む

ことがなかった(史料・前項参照)。

四月二日 岡山に來ている(石井二十八年六一頁)。

七月二十五日 T書簡三八号広島発、バートン博士宛。

七月―八月 婦人伝道会(WBM)宛てに広島での活動について書く(L

L一八九六年二一―三頁)。

八月十六日、十七日 コレラにかかった石井十次夫妻を見舞い、世話を

7・4 ハワイ臨時政府、共和国を宣言。 8・1 日清戦争はじまる(明治二十八年4・17)。

10

米国伝道会N・G・クラーク博士引退。後任はJ・L・バートン博士。

この年 神戸英和女學校は神戸女学院と改称した。

4・17 日清講和条約調印。

4・23 三国干渉。 5・1 日本伝道会社年會ならびに日本組合

基督教會總會開催。日本伝道會社の米国伝道會よりの独立を決議。

10 米国伝道會よりバートン博士を含む調査團來日、同志社の運営

について協議する。この年 コ

する(石井前掲一九七、一九八頁)。

九月十四日 石井十次と会談(石井前掲二三三頁)。

十一月二十日 岡山のベティー宅にて石井十次らと孤児院のための特別祈禱会を持つ(石井前掲二八五頁)。

十一月二十一日 神戸女学院二十年期祝会の感話を担当、また祝会後の同窓会に出席した(めぐみ一二号七、八、一四、一八一―一九頁、旭光同年十二月五日―一二頁)。

この間 タルカット女史自身もコレラに罹患したが数週間の療養により回復、再び広島に戻って十二月まで病院訪問をする(MN前掲五〇頁)。

十二月二十二日 T書簡三九号京都発、ダニエルス博士宛^④。数週間来疲労が著しくて仕事にさしかえるため休暇帰米を勧告されたが、来秋には帰任を許されたいと願っていると言う。

一八九六年(明治二十九年)

一月 この月発行のLLに、前年七、八月の頃に広島で書いた便りが掲載される(二二―二三頁)。

二月四日、六日 京都にあって石井十次の訪問を受ける(石井二十九年二四、二五頁)。

二月十四日 神戸港より帰米の途につく(LL一八九六年一八四頁、旭光同

レラが大流行し、死者四万をこえる。また広島に回帰熱が発生した。

4・6 第一回近代オリンピックピック
がアテネで開催され、一三か国・
二八五選手が参加(↓4・15)。

8・21 同志社において米国伝道
会の宣教師全員が辞表を提出。こ

年三月五日一頁。

五月十二日 サンフランシスコ着(MH一八九六年二九六頁)。

十一月四日 WBMの年次例会に出席し、広島における日清両国兵士の

間での活動について語る(LL前掲五五三頁)。

一八九七年(明治三十年)

三月 この月発行のLLに“The Work of Bible Woman in Japan”を寄

稿(九八一〇二頁)。

五月 伝道会に献金(MH一八九七年二九二頁)。

六月三十日 T書簡四〇号ニューヨークン登。

八月 伝道会に献金(MH前掲四一二頁)。

八月十一日 T書簡四一号ニューヨークン登。夏の陽気のせいか帰任延

期を考えるにいたっている。

十月十二日 米国伝道会第八八回年次総会に出席(MH前掲四八〇頁)。

十一月二十七日 T書簡四二号ニューヨークン登。クリフトン・スプリ

ングスに赴くことについて。

十二月三日 T書簡四三号ニューヨークン登。同前。

一八九八年(明治三十一年)

五月十三日 T書簡四四号ニューヨークン登。この数か月クリフトン・

れより両者の関係が断たれる。

9・18 第二次松方内閣成立。

1・16 日本学生基督教青年同盟

(日本学生YMCA同盟)成立大会。

6・16 米国・ハワイ間に併合条

約調印。 6・22 京都帝国大学

設立。

1・12 第三次伊藤内閣成立。

スプリングスの保養所に滞在しており、先月戻ったことがわかる。

夏 ガードナー女史、グリスウォルド女史と共にホルブルック女史、ス

トーン女史を訪ねる(MN一八九八年十一月一二頁)。

一八九九年(明治三十二年)

三月一日 W B M P の Quarterly Meeting に出席し、日本における教育

活動について語る(L一八九九年二三頁、同一九〇〇年八八頁)。

五月二十三日 同六月例会の来賓の一人となる(L前掲四二一頁、同一九

〇〇年八八頁)。

六月二十九日 T 書簡四五号ナイルズ発。住所はオークランド。

七月六日―十二日 神戸女学院で開催の日本伝道団年次総会においてタ

ルカット女史の京都帰任が要請された(MN一八九九年九月二頁)。

八月三日 T 書簡四六号オークランド発。ギュリック夫妻はじめ現地

の人々に暫時の助けを求められ、ホノルル経由の帰任を考えている。

十月十六日 T 書簡四七号オークランド発。十月二十四日サンフランシ

スコ出航の予定は(左腕の)腫物のため延期を余儀なくされる(MN前掲

一二頁、LL同年四五五頁、またMN同年十二月一二頁併照)。

十一月六日 T 書簡四八号サンフランシスコ発。治療のため家を離れて

いたが間もなく帰宅の予定。「左腕は未だ三角布の中に」。

4・25 米西戦争(↓12・10)。

6・30 第一次大隈重信内閣成立。

11・8 第二次山縣内閣成立。

7・17 日英通商航海条約をはじ
め、以後成立の改正条約実施。

7・27 内務省、神道仏教以外の
宗教の宣布及び堂宇会堂設立に關
する規定を定める。 8・3 私

立学校令を公布。また、訓令によ
り公認の学校において宗教上の儀
式・教育を行うことを禁止。 8

神戸女学院はブラウン院長病氣辞
任によりソール女史が後任となる。
前記の訓令に対しては、各種学校
の地位に甘んじることで宗教教育
を維持することにした。

十二月五日 T書簡四九号オークランド発。医師の許可は出たがまだ旅立ちには早いと思っている。

一九〇〇年(明治三十三年)

四月 この月発行のMHは、タルカット女史は二月九日にサンフランシスコから日本に向かうつもりであったが事故のためこれを延期したと報じている(一六一頁)。

六月六日 サンフランシスコ出立(MH前掲二九一頁)。

六月十八日 WB M宛てにホノルル到着を報告(LL同年三六〇頁)。

以後一九〇二年十二月の神戸帰任までハワイの日本人のために伝道活動を行う。^⑧

九月十九日 「在ホノルル府日本人基督教會」より、女史の盡力に對する謝辞を記したハワイ風景写真集を贈られる(神戸女学院図書館蔵)。

一九〇一年(明治三十四年)

この年 ホノルル在住の日本人の間で伝道活動に従事(史料・前掲)。

一九〇二年(明治三十五年)

三月 この月発行のLLにホノルル便りが載る(二一八一―一九頁)。

十二月二十二日 姉フィッシャー夫人^⑨と同道で横浜に着く(MN一九〇二年十二月四一頁、MH一九〇三年一二八頁)。以後は神戸女子神学校を本據

4・14 パリ万国博覧会開く(↓
11・3)。
4・27 内務省、社寺
局を廃止し、神社局と宗教局とを
設置。
5・28 義和團事件おこ
る(↓一九〇一年9・7)。
10・19
第四次伊藤内閣成立。

6・2 第一次桂太郎内閣成立。

1・30 日英同盟協約調印。

に、学校での指導と地域・地方の伝道に力をつくす。¹⁸⁾

一九〇三年(明治三十六年)

一月十九日 神戸教会員による歓迎会に出席(月報二月二頁、旭光二月一日

三頁)。

三月十日 神戸女学院においてハワイにおける伝道活動について語る

(めぐみ三一号巻頭五頁)。

三月十一日 神戸教会老人会に勧め(月報四月二頁)。

三月二十八日 神戸女学院同窓会大会に出席(めぐみ前掲一、三頁)。

四月二日―四日 婦人矯風会第一四回大会に出席(旭光五月一日三頁)。

六月三日 神戸教会老人会(月報六月三頁)。

十月二十一日―二十四日 日本組合教会総会に伝道団代表の一人として

出席(MN一九〇三年十一月二九頁、MH一九〇四年六七頁)。

十一月七日 神戸教会老人会(月報十一月三頁)。

一九〇四年(明治三十七年)

二月 日露戦争出征兵士のため、バロウズ女史、アッキンソン師と共に

「旭光」五〇〇〇部を発送する(MH一九〇四年二五一頁)。

五月七日 関西連合婦人大祈禱会において感話(旭光六月一日四頁)。

七月 津山への伝道旅行(MN一九〇四年十月八一―九頁)。

7 日本基督教青年会同盟(YMC

A) 成立。この年 前年の凶作

で東北地方飢饉。

2・10 日露戦争はじまる(―一九

〇五年9・5)。2・23 日韓議

定書調印。

九月十三日 神戸教会老人会(月報十月三頁)。

一九〇五年(明治三十八年)

一月七日 O・H・ギューリック夫妻の金婚式のため、東京よりグリーン

ンと連署して祝状を認める(MN一九〇五年七月一四三一―一四五頁)。

二月 神戸教会に寄附(月報二月四頁)。

三月二十八日 神戸教会老人会(月報四月二頁)。

九月三日 神戸教会婦人会・老人会(月報十月二頁)。

十一月二十四日 神戸女学院三十周年記念式で「演説」(めぐみ三九号二

頁、MN十二月九頁、旭光十二月二日四頁、月報十二月三頁)。

秋 コルビー女史らと連名でWB Mに献金(LL一九〇五年五六二頁)。

この頃 活田教会に特に力を注いでいる。また姫路、京都、琵琶湖の対

岸方面にも出かけた(LL一九〇六年七三―七四頁・タルカット女史信)。

一九〇六年(明治三十九年)

二月 この月発行のLLに前記書簡抜萃掲載(七三―七四頁)。

四月十八日 アッキンソン夫人帰天。

六月八日 神戸女学院矯風会例会において感話(めぐみ四〇号五頁)。

七月十二日 ダッドレー女史帰天。

九月初旬 札幌訪問(MN一九〇六年十一月一九―二〇頁)。

7・29 桂・タフト覚書成立。

8・20 小崎弘道夫妻、米国伝道会の依頼を受け太平洋沿岸伝道に
10 日本基督教会第一九
回大会、日本組合基督教会第二
回総会において、教会のミッシ
ンよりの独立・自給が決議される。

12・21 第一次桂内閣総辞職。

1・7 第一次西園寺公望内閣成
立。
3・7 カリフォルニア州

議會、日本移民制限に関する決議
案採択。

十一月二十三日 神戸女学院文学会に参会(めぐみ四一号四頁)。

一九〇七年(明治四十年)

五月二十三日—二十九日 日本伝道団第三五回年次総会に出席(MH一九〇七年三七八頁)。

一九〇八年(明治四十一年)

一月 この月発行のMN「神戸女学院特集号」に“Early Days of Kobe College”を寄稿(五五—五六頁)。

二月十七日 J・L・アッキンソン帰天。

三月三十日 神戸女学院同窓会大会に出席(めぐみ四五号八頁)。

六月一日 日本伝道団の年次総会に出席(MN九月四頁の次・写真)。

九月 この月発行のMNに“Zako Aiko San”を寄稿(四—七頁)。

一九〇九年(明治四十二年)

四月頃 鳥取訪問(MN一九〇九年五月一四〇—一四一頁)。

五月二十二日 神戸女学院がこの日を創立、記念日と定め祝会を催したの
に出席、「演説」をする(めぐみ四九号二六、二七頁、MN六月一六四頁)。

十月七日 プロテスタント日本宣教開始五十年記念会(十月五日—十日)に
参加、聖書教授法について講演をした(MN九月二頁、MH一九〇九年四
六一頁、同一九一〇年一九頁、旭光四十二年十一月一二頁、新報同年十月十

2 米国、新移民法案可決。

8 加藤弘之『吾國體と基督教』。

2・18 移民に関する日米紳士協

約成立。 7・4 西園寺内閣総

辞職。 7・14 第二次桂内閣成

立。 11・30 高平・ルート協定。

7・1 横浜で開港五十年祭舉行。

10・8 専門学校令により神戸女
学院専門部の設立が認可される。

12・24 賀川豊彦、神戸新川にお
いて救霊団の事業に着手。 この
年 プロテスタント日本宣教開始

四日二七七頁。

十二月初頃 神戸女学院初期卒業生を自宅に招く(MN十二月四二頁)。

一九一〇年(明治四十三年)

二月 この月発行のMN「四十周年記念号」に“Some First Experiences”
を寄稿(二〇二—二〇四頁)。

四月十八日 グリーン夫人帰天。

五月三十日 日本伝道団の年次総会に出席(MN六月一八九頁・写真)。

この席上で宮崎伝道救援を要請される(同前一九〇頁)。

十月初 タルカット女史宮崎に赴く(MN十二月四二頁、同一九二一年七月

一八六頁、LL一九二一年一六九—一七一頁)。

十一月四日 J・D・デイヴィス帰天。

一九二一年(明治四十四年)

一月一日 この日附の旭光に他の宣教師たちになじり、「恭賀新年 日

向國宮崎 タルカット」と年賀広告を出す(一頁欄外)。

一月 この月発行のLLに妹ラーネド夫人の手になるタルカット女史に

関する紹介記事“*In Labors Abundant*”が載る(一〇—一三頁)。

三月二日 タルカット女史神戸に帰る(MN一九二一年三月一〇二頁)。

三月二十九日 神戸女学院第二八回卒業式に出席(めぐみ五二号・写真)。

五十周年、米国伝道会日本宣教四
十周年。

5・19 ハレー彗星、地球に最接
近。 5・25 大逆事件の大検挙
はじまる。 8・8 東海、関東、
東北地方一帯に豪雨、各地に大洪
水。 8・22 韓国併合に関する
日韓条約調印。

1・24 大逆事件、十二名の死刑
執行。 8・30 第二次西園寺内
閣成立。 10・10 辛亥革命はじ
まる。

四月 この月発行のLLに宮崎からの便りが載る(二六九―一七二頁)。

同 この月発行のMNに“School for the Blind”を寄稿(二三四頁)。

五月八日 J・H・デフォレスト帰天。

五月二十二日 神戸女学院創立記念日に話をする(めぐみ五三三―三八頁)。

夏 軽井沢に滞在し、九月に帰神した(MN十二月四八頁)。

九月二十三日 神戸女学院の集まりに出席(めぐみ前掲二七頁)。

十月十六日 大阪における年次総会に出席(MN前掲、BWP)。このち

十九日まで教鞭をとっていたが二十日朝より病床につく(MN前掲、同二七頁、BWP)。

十一月一日 帰天(史料・前項。また、めぐみ前掲三一、三九頁、他)。

十一月二日 神戸女学院服喪、授業なし(めぐみ前掲三九頁)。

十一月三日 同、天長節祝賀式をさし控える(同前)。

十一月四日 午前十時より神戸女学院において葬儀をとり行い、その後

神戸春日野墓地に送る(同前、BWP)。

十一月五日 神戸女子神学校において告別式が営まれる(MN前掲)。

十二月 「故ミス、タルカット記念傳道基金」の設定が計画される(MN前掲四二頁、めぐみ前掲巻末、旭光四十五年一月一日四頁)。また、この月

発行のMNは「タルカット追悼記念号」と銘打たれている。

173. HE LEADETH. EGGS. (T.M.) He leadeth me / O blessed thought.

いつくもふかを主のよみ かれてこのよのたひなきあ ぬむう れしき

CHORUS.

いつくもふかを主のよみ たりてみてはひかれつ あめにのほ りゆふ

タルカット女史愛唱の讃美歌
―新撰讃美歌より―
(現行二九四番に対応)

註

① 但しLELはまた、当時タルカット女史は三四歳であったとも言う。実妹の証言ではあるが、女史は一八三六年の生まれであるから、もし年齢の方をとるならば、女史がニューヘイヴンの集会に出席したのは一八七〇年頃ということになる。

② 発信の日附と整理番号との入れ違いは、ほかにも時折見られることである。

③ 米国伝道会の協力機関たる婦人伝道会は *Woman's Board of Missions (W.B.M.)*, *Board of the Interior (W.B.M.I.)*, *Board of the Pacific (W.B.M.P.)* の三者から成っており、プリマスのタルカット女史はW.B.M.、イリノイのダッドレー女史はW.B.M.I.に所属する。MHはこの点を誤記。

④ A.R.一八七四年六〇頁には「十一月の開校以来…」とある。

⑤ 書簡の内容から考えると、これが書かれたのは有馬滞在中のことであつたと考えられる。

⑥ 頭書も署名もない一通で、行間の書きこみ以外は筆跡も全く異なる。翌年七月発行のMHはこれを「在日伝道団の婦人宣教師の一人が本国の姉妹に宛てたもの」として個人名を伏せたまま掲載した。

⑦ 開校に関する史料についての考証は『神戸女学院百年史 総説』四二頁以降にゆだねたい。関連のT書簡は三二〇号である。

⑧ DWLによれば九月のことである。なお雑報九月十七日附は一部散佚のため肝腎の日程を確認することができなかった。

⑨ この夏ダッドレー女史がW.B.M.I.宛てに「二、三日中に二人を神戸に迎えに行く」旨書き送った日附は不詳である（LL一八八六年六七頁）が、その後タルカット女史は神戸に（史料・後出）、クラークソン女史は京都に入つた（C書簡四一五号）。

⑩ 石井のタルカット女史に言及すること、明治二十年九回に始まり二十九年五回に至るまで最高は二十二年の三六回に及ぶ。

⑪ 女史の岡山時代に詳しいベティ夫人の言ではあるが、鳥取滞在が「一八八八年と八九年の冬」とあるのは、他に例を見ない。
⑫ DWLは女史の京都在住をこの年九月から一八九四年十月までとする。この間の女史の消息については、LL一八九〇年四四六頁、同一八九一年四五五―四五六頁、同一八九三年四二〇頁、同一八九四年五六八―五六九頁、A.R.一八九二年八九頁、同志社百年史資料篇(二)三、二二一、二二二頁、週報二十四年一月九日一頁、T書簡三七号等参照。

⑬ MH一八九三年三八〇頁「七月受領の献金」の項には次のように記されている。*Legacies: ..., West Hartford, Mary Talcott, by Eliza S. Talcott, Adm'r, 1,000.00*

⑭ 広島に来た時を十二月としたのは女史自身の言（LL一八九六年二一―二三頁・女史が一八九五年七、八月頃書いたもの）によるが、ノースロップ、ルミスらは十一月と記しており、LELはノースロップに依據している。この地での消息を伝えるものとしてはほかに、T書簡三八号、LL前掲二二二―二三三、五五三頁、MH一八九五年一四三頁、同一八九六年四九頁、A.R.一八九五年九二頁、旭光二十八年八月五日二頁等がある。

⑮ 米国伝道会の別のコレスボンディング・セクレタリーC.H. Daniels, D.D.であろう。バートン博士来日中のためと推測される。

⑮ 女史のハワイにおける消息を伝える記録は、L L一九〇〇年三六〇頁、同一九〇一年六七頁、同一九〇二年三頁、一一八一—一九頁（女史自身の便りの抜萃である）、三八二頁、A R一九〇一年一二〇頁、同一九〇二年一四二頁。

⑯ タルカット家四姉妹の長姉。米国伝道会日本派遣宣教師S・L・ギューリック夫人コーラと東京YMCAのガレン・M・フィッシャーの母。時にWBMPの副会長であったM N一九〇二年十二月四一頁、同一九〇三年四月一四〇頁。

⑰ 神戸での活動に関する記述には、以後の年譜中で言及しているもの以外に、L L一九〇四年二二二、二八四頁、同一九〇五年二二四頁、同一九〇六年一一三頁、同一九〇九年九二頁、同一九一〇年四三頁、同一九一一年四二五頁、M H一九〇五年三〇五頁、同一九〇九年四六一頁、M N一九〇九年十一月三三頁がある。

⑱ この日はその後創立者記念日と呼ばれるようになり、創立記念日は十月十二日とされて今日にいたっているが、このことに關する考察を『神戸女学院八十年史』に見ることができ（一九九一二〇頁）。

⑲ 宮崎滞留中のタルカット女史からWB Mに宛てた便りで、冒頭の口調から一九一一年早々のものと推測する。

⑳ これがローラ・E・ラーネド夫人の手になることは、L L一九一二年二頁によつて明らかにされている。

㉑ 女史の帰天を報じまたこれを悼む記事は数多く見い出されるが、M Hが終焉の地を京都としたのをはじめ、誤解や事実誤認を含むものも時として見受けられる。本誌の年譜や索引がそれらを修正するよすがともなればこれに勝る幸いはない。ここでは、これまで扱ってきた文献史料の中から関連の箇所を拾いあげておく。M H一九一二年一二一三、四五、一四四、四四五、五二四頁、A R同年一六三、一六八頁、L L同年二一五、一四九、一五七—一六一頁、M N一九一一年十二月「タルカット追悼記念号」、同一九二二年六月一六一、一七六頁、七月一八七、一八八頁、新報四十四年十一月九日七二二頁、同月十六日七三六頁、旭光同年十二月一日三、四頁、同四十五年一月一日三—四頁、めぐみ五三—五五頁、三—三三、三九、四二頁。但し女史最後の数日と死去・葬儀に関してはM N追悼記念号のバロウズ女史の記事（四七—四八頁）とB W Pに見るべきものがあろう。

本稿の動機は、いわゆる偉人の伝記を書くことではなかった。しかし蒐集した史料の中には陰影も豊かに女史の人物を髣髴せしめる美しい文章が散見されたもので、いざ未発表のタルカット書簡と共にこれらの史料を紹介し、より形の整った年譜を添えて、いつか誰かが志すかもしれないすぐれた伝記作成のために供する機会を得たいもの—と思いつつ筆を進めた。

本稿作成に際しては、歴代史料室職員、殊に川村慶子、佐伯 睦、吉年ユウ子、栗木順子諸姉の日頃の業績に少なからず助けられた。また、図書館の稀観書やそれに類する文献類の頻繁な閲覧、マイクロフィルムの利用のため、奥 祥子主任、溝口良子司書、アルバートの山田洋子姉から煩瑣を厭わぬ協力をいただいた。一篇の粗末な試みのために豊かな援助が与えられたことを、心からの感謝の念をもって、記録にとどめたい。